『義経千本桜 渡海屋』片岡仁左衛門の渡海屋銀平実は新中納言知盛・片岡孝太郎の女房お柳実は典侍の局
©松竹株式会社

［歌舞伎］

市川團十郎襲名と新世代の活躍

矢内 賢二

コロナ禍の影響

年明け早々から新型コロナウイルス感染症に対するまん延防止等重点措置が実施される中、各劇場では感染者や濃厚接触者の報告が相次ぎ、一部日程の上演中止や、配役・演出の変更が頻繁に生じた。8月歌舞伎座では出演者の感染により手塚治虫原作の新作『新選組』、『東海道中膝栗毛 弥次喜多流離譚』で大胆な配役変更が行われ、かえって大きな話題になる一幕もあった。その後も感染状況は一進一退の様相を見せるが、行政機関による規制等は徐々に緩和の方向へ進み、例えば歌舞伎座では8月からほぼ全席の販売を開始するなど、段階的に感染対策を緩和。10月特別企画公演からは長らく禁じられていた大向うの掛け声も限定的に再開された。

十三代目市川團十郎の襲名

2020年5月から7月にかけて予定されていた市川海老蔵改め十三代目市川團十郎白猿の襲名披露が、コロナ禍による2年6カ月の延期を経て、11月・12月の歌舞伎座公演で実現した。團十郎は11月に『勧進帳』の弁慶と『助六由縁江戸桜』の助六、12月に『京鹿子娘二人道成寺』の押戻しと助六をつとめ、落ち着いた端正な舞台を見せた。『勧進帳』では松本幸四郎の富樫、市川猿之助の義経、また11月の『助六』では尾上菊之助の揚巻、尾上松緑の意休と、近年機会の減っていた同世代の俳優との共演により、次代を担う世代の活躍を印象づける公演にもなった。

11月『外郎売』、12月『毛抜』は團十郎の長男・八代目市川新之助の初舞台で、『毛抜』の粂寺弾正を史上最年少の9歳でつとめたこと、また同じく長女の市川ぼたんの出演も話題になった。

『助六由縁江戸桜』市川團十郎白猿の助六 ©松竹株式会社

ベテランの円熟

ベテランの円熟した技芸が改めて光輝を放った一年でもあった。

尾上菊五郎は、5月歌舞伎座『土蜘』の頼光、10月国立劇場『義経千本桜 四の切』の義経で、舞台一杯に広がるふくよかな芸を堪能させて出色であった。1月国立劇場『南総里見八犬伝』の犬山道節、11月歌舞伎座『外郎売』の工藤祐経では立役としての立派な相

『義経千本桜 四の切』尾上菊五郎の源義経 写真提供:国立劇場

『ふるあめりかに袖はぬらさじ』
坂東玉三郎の芸者お園 ©松竹株式会社

貌と貫禄を見せた。

片岡仁左衛門は2月歌舞伎座『義経千本桜 渡海屋・大物浦』で一世一代を謳って知盛をつとめ、義太夫狂言の様式とリアルさとを融合させた当たり役を演じ納めた。3月同座『天衣紛上野初花 河内山』では体調不良による休演を挟みながらもすっきりとした姿の良さと凄みを見せ、9月同座『仮名手本忠臣蔵 七段目』の由良之助でも風格を示した。

坂東玉三郎は6月歌舞伎座『ふるあめりかに袖はぬらさじ』で当たり役の芸者お園を演じた。姿態の美しさに加えて、膨大なせりふを操るしゃべりの芸が絶妙で、新派から多数の客演も得て高い舞台成果を挙げた。12月歌舞伎座『助六』の揚巻は、風姿の華麗さ、せりふの巧みさはもちろんのこと、満江への情愛など、しっとりとした陰影が一段と深くなった至芸であった。

中村雀右衛門は1月歌舞伎座『四の切』の静御前、5月同座『金閣寺』の雪姫、9月同座『七段目』のおかると、華やかさと色気に富んだ演技で実力を十分に発揮。着実に立女形としての地歩を占めつつある。

中村梅玉は重要無形文化財保持者の各個認定を受け、松本白鸚は文化勲章を受章。竹本葵太夫が歌舞伎竹本としては初めての芸術院賞を受賞した。

次代を担う世代の活躍

1970年代生まれの俳優を中心に、次代を担う世代が一層の活躍を見せ、本格的な世代交代の到来を予感させた。

市川猿之助は1月歌舞伎座『四の切』の忠信、11月同座『勧進帳』の義経で深い情感を表現し、その充実ぶりが印象的であった。また昨年に続き、歌舞伎座の3月『新・三国志 関羽篇』、4月『天一坊大岡政談』、7月『當世流小栗判官』と、三部制の上演時間に合わせて再構成した演目の上演に取り組んだ。

尾上菊之助は古典の大役から新作まで奮闘を見せた。3月国立劇場では『盛綱陣屋』の盛綱を演じ、10月同劇場では2年前にコロナ禍で公演中止になった『義経千本

『當世流小栗判官』市川猿之助の小栗判官·市川笑也の照手姫 ©松竹株式会社

『義経千本桜 四の切』尾上菊之助の源九郎狐 写真提供:国立劇場

桜』の三役を完演と、義太夫狂言の大役に挑んで堅実な演技を見せた。2月歌舞伎座『鼠小僧次郎吉』の稲葉幸蔵、5月同座『土蜘』の土蜘の精、6月博多座『魚屋宗五郎』の宗五郎と、家の芸の継承にも取り組み、7月歌舞伎座では2019年に初演された『風の谷のナウシカ』を再構成し「上の巻―白き魔女の戦記―」として上演。9月同座の二世中村吉右衛門一周忌追善興行では、岳父吉右衛門が松貫四(まつかんし)の名で構成した『藤戸』を好演した。

尾上松緑も急速に存在感を増した俳優の一人で、芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した。歌舞伎座での5月『金閣寺』の松永大膳、6月『車引』の松王丸、9月『寺子屋』の松王丸、11月『助六』の意休でスケールの大きさを見せたほか、10月には義士外伝の講談を舞台化した『荒川十太夫(あらかわじゅうだゆう)』を企画·上演。同演目は大谷竹次郎賞を受賞し、珍しい現代の「講釈種」として新作の可能性を示した。

松本幸四郎は4月歌舞伎座『荒川の佐吉』の佐吉で芝居巧者なところを見せたほか、8月同座では珍しい『安政奇聞佃夜嵐』の青木貞次郎を演じ、中村勘九郎の神谷玄蔵とともにリアルで緊張感に富んだせりふ回しにより成果を挙げた。

中村勘九郎は1月歌舞伎座『一條大蔵譚』の大蔵卿が爽やかな好演であった。また2月シアターコクーン『天日坊』の天日坊はナイーブさと豪胆さとを兼ね備えた傑作であった。10月、11月には猿若町発祥180年記念を謳って浅草寺境内で平成中村座公演を開催した。

中村梅枝は3月国立劇場『盛綱陣屋』の篝火、7月同劇場『紅葉狩』の更科姫で品格のある舞台を見せ、10月同劇場『義経千本桜 釣瓶鮓屋の場』の平維盛では貴重な古風さと鷹揚さが際立った。

5月歌舞伎座『弁天娘女男白浪』では尾上右近の弁天小僧、坂東巳之助の南郷力丸がみずみずしい共演で、いずれも今後に期待を抱かせた。巳之助は6月歌舞伎座『車引』でも梅王丸を好演。中村壱太郎の上方型の桜丸とともに強い印象を残した。市川染五郎は6月歌舞伎座『信康』で主役の徳川信康を演じたのが話題になった。また短期公演ではあったが9月大阪松竹座の片岡愛之助らによる『夏祭浪花鑑』が上方らしい雰囲気の横溢する好舞台であった。

一方コロナ禍の小康ムードを受けて俳優の自主公演が多数開催された。6月の中村鶴松「鶴明会」、中村京蔵・中村いてう「踊り競べの會」、7月の中村鷹之資「翔之會」、8月の中村梅玉一門「高砂会」、尾上右近「研の會」、9月の上村吉弥一門「みよしや一門会」と、いずれも意欲的な企画に取り組んだ。劇団前進座は、5月国立劇場で五世河原崎国太郎三十三回忌追善として『杜若艶色紫 ―お六と願哲―』を41年ぶりに上演した。

雑誌『演劇界』の休刊と国立劇場の建て替え

唯一の歌舞伎専門誌であった『演劇界』（演劇出版社発行、小学館発売）が3月3日発売の4月号で休刊となった。読者層の高齢化に加え出版界におけるデジタル化への移行が急速に進み、新規読者の獲得が見込めなくなったことが理由という。

東京・半蔵門の国立劇場の建て替えに伴う再整備計画の概要が発表され、9月から「初代国立劇場さよなら公演」がスタートした。2023年10月末をもって閉場、大劇場・小劇場・演芸場等をすべて取り壊し、劇場のほかホテル、レストランなども入った施設を整備する。再開場は2029年秋の見込みで、それまでの期間は新国立劇場や国立能楽堂などで公演を行う。

物故者

6月17日に五代目坂東竹三郎が逝去。上方の雰囲気を色濃く漂わせる女形として、『封印切』のおえんなど花車方の役どころや、『引窓』のお幸などの老け役で活躍。時折演じる立役にも独特の味わいがあった。自主公演「坂東竹三郎の会」では復活狂言に取り組み、松竹上方歌舞伎塾の講師をつとめるなど、上方歌舞伎の振興にも努めた。

6月23日には六代目澤村田之助が逝去。『実盛物語』の小万、『伽羅先代萩』の栄御前などで品格のある芸を見せた。また『魚屋宗五郎』のおはまなど世話物の女房役、『国性爺合戦』の母渚などの老け役も演じて幅広い芸域を示した。立役では『髪結新三』の手代忠七、『矢の根』の曽我十郎など、江戸の和事を演じる貴重な存在であった。長らく国立劇場歌舞伎俳優研修の講師をつとめ、2002年には重要無形文化財保持者に各個認定。好角家としても知られ、日本相撲協会横綱審議委員会の委員をつとめた。

1月19日には菊五郎劇団音楽部部長として活躍した長唄三味線の杵屋淨貢が逝去した。

やない・けんじ

国立劇場勤務等を経て明治大学教授。博士（文学）。専門は歌舞伎を中心とする日本芸能史。著書に『明治キワモノ歌舞伎 空飛ぶ五代目菊五郎』（白水社）、『ちゃぶ台返しの歌舞伎入門』（新潮社）など。東京新聞で歌舞伎評を担当。